

# 和泉式部日記研究

藤原規代

## 目次

はじめに

第一章 作品形成上の特色

第一節 和泉式部日記の手法

第二節 基底に流れるもの

第二章 帥宮と式部との恋

第一節 障害物の意義

第二節 共感の世界

第三章 和泉式部という女

おわりに

## はじめに

短大の一年で「伊勢物語」に触れて以来、私は、機知のやりとりによる恋愛、というものに、大変興味を持つようになった。その機知のやりとりは、和歌の贈答によって行なわれる。表面だけを読めば何でもないもののように思われても実は、裏側に、隠された様々な意味を持つ。それは、来ぬ人への思慕であったり、誘いであったり、恨みつらみであったりもする。そういった様々な意味を、和歌から読み取って始めて、男女間の恋愛は進行していくのである。ま

さに恋とはかけひきである。

これら、機知のやりとりの中味を理解し、自分のものとして擷んだ時、私は何とも言えない満足感に浸る事ができた。そしてこの度、卒業論文を書くにあたり、是非この類の作品を研究したいと思ったのである。誠に極自然な、極衝動的な感情がきっかけとなったわけである。

こうした漠然とした観念のもとで、題材を探し求めている時、最初に目に留まったのが「和泉式部日記」であった。何故この作品を選んだのかと問われても、私には答えられない。なぜならそれは、ほとんどインスピレーションに近いものだったからだ。その証拠にそれから後、他の作品を見て廻っても、私の脳裏にひらめく何かはなかった。実に頼りない動機である。もう、こうなれば自分の勘に頼るしかない。

「和泉式部日記」は、主人公和泉式部が、愛されていた為尊親王との死別後、その弟宮の帥宮敦道親王（冷泉天皇の第四皇子）と知りあい、新しい愛情を抱き、やがて十か月の恋愛の後、周囲の冷たい目にも耐えて、親王の屋敷へと件われて行くまでの過程を描いている。長保五年（一〇〇三）四月から、翌寛弘元年（一〇〇四）正月までの、二人の緊迫した心の動きを、和歌を交えて日記的に書かれているが、全体としては恋愛物語風にまとめている。

「永遠の恋の彷徨者」である和泉式部が、果たしてどんな恋をしたのか。二人の恋愛は現代の私達に理解できるものなのか。ここでは『恋』に焦点を当てて考えていきたいと思う。

なお、本日記の作者については、最近までに他作説と自作説とが併立していたが、私個人としては、和泉式部を作者とした自作説を執りたいと思う。その理由を幾つか列挙する。

○地の文の中に、作者Ⅱ和泉式部の主観的感動が自記の如くに表出されている。

○この作品には和泉式部の心の中のことば（Ⅱ心語または独自）を表わす文が非常に多く、宮の心語と比べて特徴的である。

○和歌と地の文との微妙な交錯が、和歌の作者、すなわち和泉自身でなければなし得られないのではないか。

他にも多くの所説があるが、以上挙げた説が、私を自作説へと導く決め手となったものである。

## 第一章 作品形成上の特色

### 第一節 和泉式部日記の手法

「和泉式部日記」は、実に一四七首の歌によって構成されている。そしてその贈答歌の様態は現実では見られないような形式のものが多い。そのような特異な形式の贈答歌が和泉式部・敦道親王両者の愛情を、徐々にはあるが、それ故に確かなものへと深化させていく。

贈答形式の特異な例を、幾つか抽出してみると、まず第一に「女性からの贈歌」がある。和歌の贈答は、男性から贈歌するのが通常

であり、女性から贈歌するのは何らかの心理的な緊張による切迫した事態によるという理解によるものである。実際には必ずしも原則通りではないかもしれないが、このような理解が有効性を發揮する場面が多いことも事実である。

例えば、初会の後、帥宮と式部の上に微妙な変化が見え始める。懇願者であったはずの宮は、恋の優位者として余裕を示すようになり、一方、式部は宮の訪れを待ち焦れるようになる。女は弱い不安な立場に追いこまれる。しかも宮のお越しはない。思わぬ宮の途絶えを嘆く女は、四月の晦の日、二人にとってのそもその出会いの歌「薰る香に」（同じ枝に）の贈答を宮に思い起こさせようとす

るかのうちに、同じ「時鳥」（ほことぎす）を詠み入れて、

時鳥世に隠れたる忍び音を  
いつかは聞かん今日も過ぎなば

とかつ訴え、かつ誘っている。宮は依然としてゆとりを保ち、五月に入ってようやく女を訪れるが、女がお寺参りのための精進の中にあつたため、しつぽりと逢うこともなく帰したことから、今度は宮の優位が崩れることになる。二人の関係はここで再び微妙な変化を見せ始める。宮は「逢ひても逢はで明か」した先夜の女の仕打ちを恨みながらも、かえって一途にその志を女へと向けてしまうのである。

女からの贈歌により二人の関係が変化したわけではないかもしれないが、結果論から言えば、この贈歌が二人をより強く結び付ける点で有効であったと言える。

女性からの贈歌と言つても、本日記の場合は心情的不安よりも愛情の深化による積極性といった要素が大きいように思われる。

第二に「複数の贈答」がある。一首一首の贈答が原則であるが、感情が高揚した時には量的に増大する場合がある。最初から複数の形の贈答と、付加または反復の形の複数の贈答とがある。

ここでは後者の例を挙げてみる。「末の松山」の場面である。あの晩、帥宮が女を訪れると、女の家の前に男車が置かれてあつた。実はそれは同居の女のもとに通う男の車であつたのだが、宮は式部のもとへ他の男が通つていると誤解し、不快な気持ちで空しく帰る。激しく燃えあがつた二人の恋情は、わずか一夜のすれから再び動揺し、二人の間はにわかには遠のくことになる。宮の心は疑惑に包まれた。一方、女には納得がいかない。当然といえば当然である。宮が離れてゆく事が恐ろしい。しかも誤解から、と思うと女は嘆かざるを得ない。孤独におののき、宮にすがるだけの女は歌を詠む。

月を見て荒れたる宿にながむとは

見に来ぬまでもたれに告げよと

宮の心は女への不信、疑惑に傷ついている。かといつて女を思い切る事のできない宮は、すぐに女のもとへお越しになる。

「人は草葉の露なれや」

宮はつづやき、心を残しながらもすげなく帰ろうとする。女は思わず、

こゝろみに雨も降らん宿すぎて

空行く月の影やとまると

とすがりつく。その可憐さに宮の心もいつか解けきつていたのである。

こうしてこの贈答によって二人の親密さは回復する。宮の愛を取り戻したい式部にとつて「贈答歌における原則」などは、どうでもよい事だったのかもしれない。

第三に「初句揃えの贈答」がある。これは贈答相手同志の心情の密接な連帯を示す。

例としては、有名な五首贈答がある。九月廿日あまりの有明の月の頃、帥宮は情趣の語らいに式部を訪問し、式部も目を覚まして物思いにふけつているところだったが、周囲がまごまごしているうちに宮は帰宅して歌が贈られてくる。女は返事として心境を述べた「手習のやうに書きゐたる」感想文の中に「秋のうちは」「消えぬべき」「まどろまで」「我ならぬ」「よそにても」の五首の歌を散りばめて贈り、宮から初句揃えの返歌があり、五首一括初句揃えという特異な贈答となつて、女は満足感を覚える。「消えぬべき」については、清水文雄先生が、

「もと独立していた一首の歌が、地の文に融化したものとと思われる。」  
『和泉式部日記』

と解されるのに従う。

女の側からの五首贈答というだけでもひとつの頂点を示す新形式であるのに、対する宮の側が女の和歌の初句を生かして五首の返歌を連ね、また宮の言葉は一切省いた返歌だけの応酬。この冴えは見事である。まさに王朝の情趣生活を見事に結晶させていると言えよ

う。この五首重ねの贈答は二人の情趣的恋愛の極致を表している  
と見てよい。

第四に「キーワードの反復」がある。これは式部と帥宮との愛情  
を決定的なものにした、十月十日以後の「手枕の袖」をキーワード  
とする一連の贈答が挙げられる。「月はくもりくしぐるゝほど」  
という、「あはれなることの限り」のような季節の情趣の極致の中  
で、宮は「あはれなることの限り」の言葉を尽くして愛情を訴えか  
けるので、女は震える程の感動に浸っている。宮は可憐な程の式部  
の姿に共感して、

時雨にも露にもあてで寝たる夜を

あやしくぬるゝ手枕の袖

と詠みかけるが、感極まった女は返歌ができず、辛うじて応答した  
だけに終わる。式部程の名手が返歌できなかつた、感動的情景を担  
つた「手枕の袖」は以後、両者共感の情念の象徴となり、「手枕の  
袖」を用いた贈答は八首にも及ぶ。途中「霜」の情趣を賞美する贈  
答も含みこみ、複雑な贈答が展開するが、ある所を境に「手枕の  
袖」の主調へと戻り、その軽い変化の後、さつと終わるのである。

以上見てきたように、本日記の核となるものは贈答の和歌であ  
り、それが本日記の特徴とも言えるのだが、もう一つ注目すべき事  
は地の文の役割である。「和泉式部日記」を自作説で見ると、地の  
文にこそ式部の心が潜んでいるとするのが自然であると思われる。

和歌の世界ではどんなに隠しても、地の文には式部の不安、迷  
い、ためらいが表れ、歌の表面だけでは読み取れない式部の複雑な

気持ち伝わってくる。また、その心の変化は、季節と共に移り変  
わる自然に依存するところも多い。これは自然景物の描写が多い事  
からもわかる。ある時には「橘の花」によって女の心が誘発され、  
ある時には「雨」によって女は一層孤独をかみしめる。地の文は女  
の吐息であり、女は地の文の中で自分自身と向き合っている。

贈答歌の主題に対して地の文は敏感に呼应し、さらにつぎの応  
酬関係へと導いてゆく役割を地の文が果たしている。そして地  
の文の呼応の仕方は、贈答歌のまさに微妙そのものの心理と表  
現との機微をとらえ、再生することに努めているといえる。

藤岡忠美「日本古典文学全集18」

贈答歌が、地の文が、それぞれ役割を持ち、意味を持っている。  
この二つの要素がお互いを引き立てながらそれぞれ自身をも輝かせてい  
る。

## 第二節 基底に流れるもの

「和泉式部日記」を読んでいると、ある一つの霧雨気がこの日記  
の世界を包んでいる事に気がつく。それは決して激しいものではな  
く、むしろ全編を通じてほとんど変化を見せないものである。帥宮  
と式部の関係が深まり自然と気持ちが高まるべき場面ですら、その  
霧雨気は変わらない。そしてその霧雨気を作り出している言葉が  
「つれづれ」であり、「はかなし」なのである。

まず「つれづれ」であるが、式部にとっての「つれづれ」とはど  
ういう時のどういう状態だったのだろうか。

五月雨の頃の日記には、しとしとと絶え間なく降り続く五月雨の  
うとうしさと、宮の訪れもなくうつつと過ぐす女の心の有様が

描かれている。この雨の場面も一つの「つれづれ」である。宮一筋に恋い忍んでいるのに、その宮の訪れは絶えて久しい。これから先、宮との仲はどうなっていくのだろう。女はこんな物思いにふけっている。この場面からは、女の悲しみはあまり感じられない。それよりも一種のあきらめともいうべき冷めた意識の方が強いように思われる。流れに逆おうとせず、唯その流れに身をゆだねている気怠い姿。そうした関わる相手のいない今、自然と目の向く先は「自分」である。そこには孤独な、たった一人ぼっちの「自分」がいる。そして同時にその孤独な「自分」を冷静に見ている「もう一人の自分」がいる。静かである。余裕すら感じられる。

また、その孤独の内容も、本来持つ「寂しさ」「辛さ」といったものを、既に越えたところにあるもののように思われる。「無」の中に一人漂う姿、とでも言おうか。この孤独感は、式部にとってその個性に根ざした運命的なもののようにも思われる。運命を変えよう、とする姿勢も見られない。しかしこの状態のままではさすがに耐えられない。そこで何らかの方法によって、この「つれづれ」を紛らすのである。式部は、帥宮との恋愛や石山詣ですら「つれづれ」を慰めるためだと言っている。

その「つれづれ」を慰める事は、式部にとって「はかなし」事であった。

「つれづれ」は一時的に慰めることはできても、その生まれたる根源を絶つことはできぬ。その「つれづれ」を一時的に慰めて過ごすことを「いとほかなきや」といった。

清水文雄「和泉式部日記」

二人の恋愛には何の保障もない。まさに「はかなし」である。と

すれば、その恋愛の中で交される和歌、現実に関きかけ、現実を革新する力を全く持たない和歌の贈答は、誠に「はかな」く頼りないものであった。しかし、そんな贈答であっても、まさにそこに愛の証、心の慰めを求めていくしかないことを、「かやうのはかなし事に、世の中を慰めてある」と言う。女はそんな自分がみじめで切なく、「あさましう」意識せずにはおれない。が、今、女にとって心の支えとなるのは、それがどんなに頼りなく「はかな」くても、宮との愛の交流に寄りかかっている事しかないのだ。「はかな」いものは、どうにも紛らしようがない。唯「はかな」いものとして受け止めるだけである。それならば刹那的でもいい。その瞬間だけでも幸福に酔いしれたい。こうして恋の「はかなさ」を知りつつ式部は受け身に流されていった。

日記の内容は展開しても、これら「つれづれ」「はかなし」の意識はそのままである。ともすれば単調に見えるこれらの反復は、ひいてはこの日記の基調と化しているのである。

## 第二章 帥宮と式部との恋

### 第一節 障害物の意義

帥宮と式部、この二人はいつも周辺の人達の批判の目にさらされているようである。その最も大きな原因は、たぶん宮の相手である女に対するもので、中でもその男出入りが最も注目を集めていたようである。当の宮自身もそれを知りながら、女から離れることのできない苦悩を持っていた。女の男出入りについての噂は二人の恋愛の経過に深いしこりを残していく。二人の愛情がのぼりつめんとする時、常に水をさすのがこれである。しかし女は最後まで肯定しな

い。あくまで噂であり、誤解であるというのである。女は自己弁護している。

ともかく女がどんなに否定しても、「すぎごとする人々」の存在は二人の恋愛の影を指摘するものであり、女の隠された反面を指摘するものである。女の男出入りの曖昧さ、無気味さはかえって二人の恋愛に複雑な波紋を広げる。言いかえれば、心理的葛藤の複雑さを加え、二人の恋愛に奥行きを与える。これが「影の存在」の役割である。

また身分の違いも一つの障害であった。身分の違う恋愛は、表面の社会では認められない。それを知っているからこそ、二人の間が深まれば深まる程、帥宮もためらい女も迷うのである。

式部が帥宮のもとにあがることは「召人」として宮仕えするに過ぎないものであった。「召人」として宮の身近に置くことは許せるが、愛人として式部の家に通うことは許せない。これが宮の乳母の意見である。

一方、式部の側からしても宮邸入りは周囲の目だけでなく、本人の心も問題である。宮との恋のはかなさを嘆き続けてきた女ではあるが、いざ、宮邸入り、という一つの方向に決まってしまうと、かえって気の重さが感じられる。召人の位置は心の放浪の自由をも束縛するに違いない。今まで「つれづれ」「はかなし」といった姿勢で生きてきた式部は、一つの終着駅にたどり着くことを、そう望んではいないように思われる。それ位「つれづれ」「はかなし」といった世界が式部には必要だったのではない。

と同時に二人の間には、忍びの恋という形が必要だったのである。忍びの恋であれば、二人の立場は対等である。またそれは二人

の情熱をかきたてる障害の役割も果たす。まず第一に、逢いたい時に自由に逢うことが不可能である。第二に、お互いの現実の生活の全てを知ることができない。第三には、第一、第二のような障害の存在のために、嫉妬や疑惑が二人の世界に入りこんでくる。しかしこれらの障害が存在するからこそ、その危機を脱した後には、以前に増して二人の恋は高まり、深まり、確かな愛の世界が創り出されるのである。二人の恋は、障害を通して一歩ずつ前進するのである。

帥宮と式部との愛は、一筋の道を真直ぐにのぼりつめていく性質のものではない。宮、あるいは女、どちらか一方の情熱が高まる時他方は沈み、引き退く。また、その逆の場合もある。そして、その波が幾度も繰り返された末、二人の愛の波長が合い、頂点に達する瞬間が訪れる。がそれは、まさに瞬間であり、決して長くは持続されない。必ずそこには何らかの障害が現れる。その障害は決して二人の仲を決定的な破局へと追いやることはなく、先に述べたように確実なものへと方向づけていく。

こうして障害について考えてみると、式部自身の性格も一つの障害といえるように思われる。彼女は、何もかも捨てて宮のもとへ走るタイプではなく、どちらかといえば消極的で、決断力はあまりない。一進一退し考える慎重派である。それは式部自身、恋の空しさを知っていたためかもしれないが、私には式部のこの性格も、二人の恋愛を進める上で必要なものと思われるのである。式部だからこそ、このような恋愛ができたのだと思うのである。少し本論からずれたような気がしないでもないが、結論を言うと「和泉式部日記」が成り立つためには、「障害物」の存在が不可欠なのである。

## 第二節 共感の世界

言うまでもなく、和泉式部は王朝貴族社会の才気ある女流歌人である。その式部にとって、美しい容姿だけでなく、和歌や漢詩も堪能であり、芸術的才質に恵まれている帥宮は、恋人として身も心も集中して燃焼できる対象であった。帥宮との出会いは、芸術家としての式部にとっては、かけがえのない詩的運命だったのである。そして宮も、式部程ではないにしても、同じようなことを感じていたにちがいない。

ここで一つ例を挙げてみる。女に多数の男の噂がある、として宮は遠ざかったものの、五月雨のある日、宮は便りをするが、女はそれを「折を過ぎし給はぬをかしと思ふ」と受け止める。その後、宮の便りを目にして、女が宮を「をかし」と思ったように、宮も、「なほいふかひなくはあらずかし」と思う。激しい雨が降り、賀茂川は氾濫する。しかし二人はその洪水をも贈答歌の素材にするだけである。ここには二人だけの世界しかない。情趣の共有が宮と女の紐帯となり、二人だけの世界を真実なるものに定着していく。

「和泉式部日記」において「恋そのもの」とは何なのかを考えてみた場合、それは今述べた情趣の共有に基づくものだけでなく、その恋愛が式部の女としての深い孤独感に根ざすものでもあることに気がつく。このことに関しては、既に第一章の第二節で触れたのであるが、この孤独感とは、「夢よりもはかなき世の中を歎きわびつゝ明かし暮らすほどに」と書き始められる冒頭のみならず、作品の全体に浸透していく。そして、ここで問題になるのは、帥宮の言動に式部の心がそのまま投入されていると思われる箇所があり、それらに顕著に見られるように、独特な共感の世界が形造られていること

である。

女が厭世感に襲われ、死にたいと思う時、宮は「辛いのはあなただけではない。誰にとっても——私にとっても——辛い世の中なのだよ。」と連帯意識を見せ、

「たれもうき世」の意識は、いわば、孤独な魂と魂との間の連帯の意識である。

清水文雄「王朝女流文学史」

宮が女に宮邸入りを勧める時、「同じ心に物語聞えてあらば、慰むことやある、と思ふなり」と宮自らが共感の意識を自覚している。女が、ひとり身の「つれづれ」「はかなさ」から脱出しようとしたように、宮も、自身の環境における孤独、すなわち「つれづれ」「はかなさ」を女によって慰めようとしたのである。

これらの孤独感と共感性は、深く結び付いている。すなわち、孤独な人生を分かちあうものとして初めて成り立つ共感であり、そうした共感性の存在が一層切なく孤独を感じさせる。結局二人は、似た者同志なのである。似ているからこそ、ひかれあうのかもしれない。お互いがお互いを求め、支え、それぞれの空白を見出している。同じ孤独を知っている二人は、まさに相手の中に共通の魂を見出しているのである。帥宮と式部を結び付けていたものが外側の機知の世界だけでなく、内側の捕えどころのない、奥深いところにある「魂」であるとわかった今、もはや二人を引き離すものは何もない。

### 第三章 和泉式部という女

人は式部を「浮かれ女」と言う。しかし、本当にそうであろうか。愛欲のままに、男から男へと渡り歩くような女であろうか。確かに

式部の生涯を洗ってみれば、外に男出入りの聞こえは高い。だが、それ故に「浮かれ女」と言い切ることができるのか。

式部は、もともと淋しい女だったと思う。そのことは式部の歌集を紐解いてみればわかる。哀愁と寂寥に満ちた歌ばかりである。淋しいのは、愛に飢えているからだ。だからこそ本当の愛情を求めて歩いたのであるが、結果としては、それが「浮気な女」といった恰好に、よそ目には映ったのである。そして探してあてたのが帥宮だったのである。

それにしても不思議な女である。帥宮と二人だけの世界にある時には、「人のいふほどよりもこめて」、あくまで可憐、一筋に宮に頼りきる純情な女性であるのに、遠く距離を置いて見ると、常に疑惑の影を漂わせ、宮の心を休めることのない疑わしい女性。重なり合うはずのない二つの式部像が重なっている所に、不思議な魅力が隠されている。多くの男達がそうであったように、宮も式部のその妖しい魅力に引きつけられたのである。

「あやしきわざかな、こゝにかくてあるよ」とは、女の不思議に魅せられ、とまどう男の吐息である。

この日記を、和泉式部その人が書いたのならば、式部は自らの持つ「不思議な魅力」を承知していたことになるのだろうか。私は先程、「式部は、もともと淋しい女だった。」と述べた。その考えは今も変わらないが、自らの持つ魅力を熟知している成熟した女性。そして、どこかもろく、支えを必要とするような淋しい女性。ここにも一見矛盾して見える二つの式部像が表れている。しかし、どの姿も確かに式部の姿なのである、まさに不思議な女性である。幾つもの仮面を持つ女性である。

その「幾つもの仮面」の中でも、私が特に心ひかれるのは、ひとつの恋に純粋な女の姿である。式部自身、恋の空しさを人一倍知っていたはずであるのに、どうしてこんなにも帥宮という男性を愛したのか。それは、先に述べたように、帥宮が式部にとってかけがえない人だったからである。帥宮との恋は、式部に、人生というものの、男女の愛というものの限らない夢と情熱を与えたであろう。ただし、恋愛中に式部がそういったことに気づいていたとは思えない。むしろ恋愛中の式部は、常に不安定な状態だったように思われる。相手を思う気持ちが強ければ強い程、失った苦しみを思うと、怖くて逃げたくなる。以前に、恋人であった為尊親王の死というものを経験している式部が、帥宮を失う事を最も恐れたであろうことは容易に想像がつく。そして奇しくも、その今の恋人、帥宮は死んだ為尊親王の弟なのだ。

恋は幸せを与えてくれるけれども、それ以上に不安を産み出すもの、と式部は知っていたはずである。それでも式部は、恋に生きた。日記には書かれていないが、帥宮も式部との愛が始まってわずかな時しか経ぬ間に亡くなっている。この二人の宮の死は、式部を深い嘆きに突き落としたであろうが、反面、この日記をはじめとし、式部を式部たらしめた数多くの秀歌を産み出す原動力になったものとも思われる。

二人の恋は短かったが、式部は決して後悔しなかっただろう。それは、この日記を読めばわかる。文のあちこちに二人の愛情が溢れているのではないか。式部は、日記という形で「はかな」く、苦しかった恋を、美しく永遠なものとして結晶化させた。そして真実の愛の日々を確信したはずである。生前はもちろん、死後も帥宮を慕っ



て止まない、悲痛の思いを歌う和泉式部。それほど激しい恋をすることのできる和泉式部を、私は、怖くも、うらやましくも思うのである。

### おわりに

「読めば読む程、和泉式部という女性がわからなくなる。」

これが、今の私の正直な感想である。最初は、「恋多き女」かと思っていたが、繰り返して読むうちに、次から次へと新しい式部が顔をのぞかせて、私の頭の中でまとまりがつかなくなってしまう。一番はつきりとわかるのは「一筋縄ではいかない女性」ということである。一見しとやかな、落ち着いたその風貌の、一体どこに、これほどの激しさを秘めているのか。

今回、その焦点を『恋』に当てて述べてきたが、『恋』とは切っても切り離すことのできない『心』の微妙な動きも見ることができたとと思う。式部は『恋』の持つ優しさ、むごさ、やるせなさを、全身全霊で私達に伝えてくれている。と同時に、人間の心がこんなにも複雑で繊細であるということに気づかせてくれた。外観から古典に取り組んだ私が、ここまで深く考えられるようになったのも、ある種の進歩である。

この研究をしていて、もう一つ、気がついたことがある。日本人の語彙の豊富さである。人間は複雑な感情を持っているが、その様々な心の状態を、微妙なニュアンスの違いをも、的確に表現できる日本語の何と多いこと。中には、以心伝心で話をすませるためか、今ではもう「死語」と化してしまった言葉もあるが、やはり日本人は繊細な心の持ち主であると言えよう。そして式部も、その繊細な

心の持ち主の一人だったわけである。

式部の視線が空を捉える。式部のこの独特な姿が目には浮かぶようである。今回の研究で何となく和泉式部という人物が掴めたかもしれないが、やはりまだまだである。とにかく一歩でも、式部により近づくことができた。どうやら、すっかり式部の虜になってしまったようだ。もし私が男だったら、やはり、式部を愛した男達と同じような思いを抱くのだろう。とりあえず今は、私のインスピレーションを信じて良かったと思っている。

### 参考文献

- 和泉式部日記 清水文雄 岩波書店  
和泉式部研究 同 笠間書院  
王朝女流文学史 同 古川書房  
全講和泉式部日記 円地文子 鈴木一雄 至文堂  
和泉式部 いのちの歌 篠塚純子 至文堂  
王朝女流日記必携 學燈社  
日本詩人選8 寺田透 筑摩書房  
柊原本 和泉式部日記 解題 吉田幸一 笠間書院  
譯注と評論 今井卓爾 早稲田大学出版部  
日本文学大系20 遠藤嘉基 岩波書店  
日本古典文学全集18 藤岡忠美 小学館

〔評〕

一、先入観を対象に押し当ててゆくのでなく、素直で柔軟な心で、式部の作品の表象に即して思考を展開させて行った所がよい。文学研究の本道をゆくものということができる。

二、和泉式部日記の自作・他作の説は、たしかに学説としては二通りあったが、何よりも、この日記を素直に読めば、式部以外の人に書けないということは、おのずから分る。あなたは、その自作説の立場から論を進めているのであるが、その立場から、この日記の贈答歌にゆきとどいた眼が注がれているばかりでなく、特に地の文に着眼し、その機能を重視する視点の見られることに、心引かれた。「地の文は女の吐息であり、女は地の文の中で自分自身と向き合っている」といっている所に、その鋭い捉え方が見える。

三、すぐれた作品論として推重したい。

(清水)